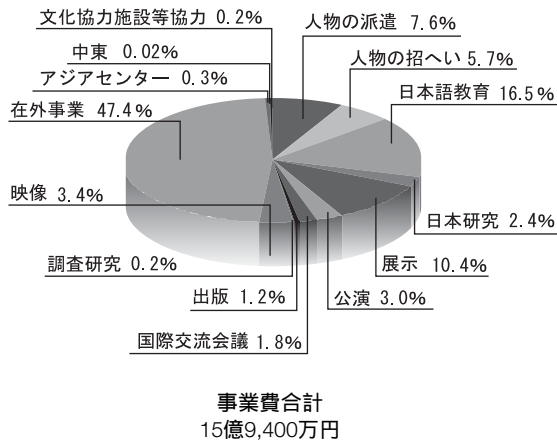


西欧

概要



事業費割合では、事務所関係事業(48.0%)、次いで日本語教育(16.0%)、人物交流(13.5%)が大きな割合を占めた。近年、各種周年事業が続いた西欧地域では、そのモメンタムを活かしつつ、日本との共通課題についての知的対話や、共同の新たな創作活動を重点的に支援した。

パリ日本文化会館では、「ひととロボット展」を開催し、ひととロボットをテーマに多角的な事業を展開した。からくり人形のデモンストレーションについては、イギリス、イタリアでも実施され、日本の誇る科学技術を生み出し支えてきた文化的・歴史的背景を分かりやすく伝えることに成功した。舞台芸術分野では、イタリア2都市、ドイツ3都市で、薩摩琵琶・尺八演奏会が行なわれ、地元機関との協力・連携をとりつつ、古典から現代までの曲目を演奏し、邦楽に馴染みのない観客を魅了した。

日本語教育分野においては、イギリスにおいて初等日本語教育関係者を対象にした支援が始まり、また、日本語能力試験の受験者が増加するなど、広がりをみせている。

知的交流分野においては、日欧国際会議助成プログラムを通じて、政治、経済、文科等の多様な分野における日欧間の知的交流を積極的に支援した。

海外事務所報告

フランス

パリ日本文化会館

1. 概況

政府の財政赤字の改善策の一環として失業保険などの支給条件が見直され、そのため舞台関係短期労働者(アンテルミッタンのストが行なわれ、アヴィニヨン演劇祭など大規模な文化フェスティバルが中止に追い込まれた。

2003年10月よりフランスにおける中国年として「山と奇跡：宋・金時代の伝統絵画展」(グラン・パレ)、「Chen Zen回顧展」(パレ・ド・トーキョー)などが開催された。1月には中国の正月、春節を祝うパレードがシャンゼリゼ通りで開催され、エッフェル塔が照明で赤く染め出された。

2003年度のヨーロッパ文化首都には仏北部リール市が指定され、12月のオープニングには50万人以上が集まった。2004年11月まで1年間、さまざまな文化行事が開催され、日本のアーティストも参加の予定である。

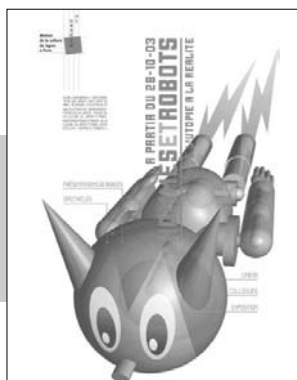
2004年3月、第3次ラファラン内閣ではルノー・ドナデュー・ド・パーブル氏が文化相に就任した。文化政策としてはヴェルサイユ宮殿美術館、ルーブル美術館に続いて、ギメ、オルセーの両美術館のステータスが2004年1月より「公的機関」に変更された。

2. 日本との文化交流事業

日本のアニメや映画は引き続き好評で、フォーラム・ド・イマージュでは「日本の新しい映像」特集が開催された。また北野武監督『座頭市』、河瀬直美監督『沙羅双樹』、宮崎駿監督『魔女の宅急便』などが一般劇場で公開された。

モンペリエダンスフェスティバルでは勅使河原三郎氏「Green」、E・クレスプール氏/岩下徹氏「うぐいす」が予定されていたが、フェスティバルはアンテルミッタンのストで中止となった。

展覧会については、2003年前半に、日本をテーマとした複数の写真展がパリおよびパリ近郊で実施された。仏文化省・写真遺産部門は、日本の戦後を代表する写真家約20名の作品170点あまりを集めた「昭和20～50年代の日本：蘇る写真展」をシュリー館にて実施した。第7回リヨン現代美術ビエンナーレでは、20世紀後半の美術界で活躍した作家の一人として草間弥生氏の作品が展示され、できやよい氏の作品も出品された。



ひととロボット展ポスター



ひととロボット展
ロボットデモンストレーション

3. パリ日本文化会館の活動

<活動方針>

今年度は「大ロボット展」の開催を主要事業として展開した。本企画に先立ち、日本国内で大ロボット展企画委員会、同実行委員会を組織し、企画に当たっては外部の有識者の意見を取り入れ、また実施面では民間企業の協賛、協力多数を得た。この事業はこれまでの課題であった、ひとつのテーマを中心に、展示・公演・シンポジウムなどいろいろな形で催しを行なう複合的の実施、外部有識者の意見を取り入れること、民間企業の協賛を得ることなどを達成することができた。

<2003年度事業例>

●複合事業「ひととロボット展」

10月下旬から1月末まで、ひととロボットをテーマに展覧会、デモンストレーション、シンポジウム、映画、公演などの事業を実施した。

展覧会「電脳空間の夢想」では、高階秀爾氏監修により、椿昇、岩井俊雄 + ばばかよ、八谷和彦、藤幡正樹 + 銅金裕二、ヤノベケンジ、立花ハジメ + 宮島達男、明和電機各氏によるロボットをテーマとした作品を展示、また現代日本の日常生活の中のロボットの側面をビデオで、日本人とロボットの関わりについての歴史的推移をパネルで紹介した。

PaPeRo、PINO、ASIMO、HOAP-2、QRIO、AIBOを紹介したロボットデモンストレーションは毎回会場が満員になる人気であった。また、日仏それぞれのロボット・コンテストの紹介、フランスチームによる実演、IDCロボコンに参加した日仏学生による対談も行ない、会館には若者が多数訪れた。

日本におけるロボットの源流として、からくり人形師九代目玉屋庄兵衛氏のからくり人形デモンストレーションと、名古屋大学大学院工学研究科教授末松良一氏による講演会も実施した。

シンポジウムは3回実施し、第1回は人間とロボットとの関係の日本と西洋との比較中心に、磯村館長が司会し、高階秀爾氏、伊東順二氏、C.ソテール氏、J.マウ氏が参加した。第2回は「ロボット：科学と文化の間」と題し、ロボットの研究開発の専門家 - 高西敦夫氏(早稲田大学教授)、北野宏明氏(ソニーコンピュータ科学研究所所長)、F.カプラン氏(ソニーコンピュータ科学研究所パリ支部所員)、ダリオ氏(サンタンナ大学教授) - が参加し、人間とロボットの共生、日欧のロボットに対する認識の相違について話し合った。第3回は「Tokyo 2004」と題し、伊東順二氏、J.サンス氏(パレ・ド・トーキョー館長)が現代日本のポップカルチャーや文化トレンドを、ロボットを切り口とし



内濠十二景あるいは二重の影

で紹介した(司会：磯村館長)。

公演部門では、明和電機のライブ・パフォーマンスを実施した。独創的かつユーモラスな舞台を観客は楽しんだ。また、金森謙氏率いるProject Noism04による「Wall」(基金制作)においては、日本の若いコレグラファーを当地に紹介することとなった。

映画では、日本のロボット・アニメと、ドキュメンタリーを上映した。

ロボットという現在関心の高いテーマを選び、多角的に事業を展開し、テクノロジーだけでなくひととロボットの関係という文化的側面に踏み込むことによって深みと広がりのある事業となり、マスコミにも多く取り上げられた。

●能・狂言(能「翁」、狂言「鞠猿」「川上」、創作能「内濠十二景あるいは二重の影」、新作能舞「百扇帖」ほか)

文化庁助成を受け、渡邊守章氏制作総括、観世榮夫氏、野村万作氏、野村萬斎氏ほかが出演した。2月23日～26日の4日間のプログラムで、囃子方のコンサートも実施した。

入場券が販売開始直後に売り切れる人気の高さで、当日の観客の反応も大変好評であった。一流の出演者による公演であったことが成功の主な理由であろうが、一方当地で能という舞台芸術が高く認知されてきていることが何われ、ル・モンド紙別冊文化情報誌などにも紹介された。

●市川崑監督映画特集

今までフランスでは配給ベースで6本しか紹介されていなかった市川崑監督の大規模な特集で、『ころこ』『満員電車』『おはん』『どら平太』など19本の作品が上映された。岡崎宏三撮影監督が、『我輩は猫である』撮影現場や市川監督の思い出について語る特別上映会も開催した。

イタリア

ローマ日本文化会館

1. 概況

2003年下半期のEU議長国を務めたイタリアであるが、ベルルスコーニ首相が繰り返す不適切発言、また対イラク情勢に見せる米国寄りの姿勢などで、他EU諸国との軋轢が際立つ年となった。イタリア内外からの現政権への批判は強く、春の地方選挙では過半数の県で中道左派が右派を逆転し、内政においても、首相自らを免訴する裁判凍結法、中低所得者層の負担増に繋がる年金改革案、メディア寡占禁止を緩和する「ガスパリ法」などにより、第二次ベルルスコーニ政権に対する国民の不信は



市川崑監督

加速度的に高まった。

イラク戦争を巡っては、2月のローマ大反戦デモの後、各地で反戦運動が続くなか、4月にイラク派兵が決定された。11月にはナッソリアの駐留イタリア軍司令部を標的とした自爆テロ事件が勃発、19名のイタリア人兵士が犠牲となって、国中を大きな衝撃と悲嘆のうちに沈めた。

記録的猛暑の夏は2回の大停電に襲われている。とくに、復旧に最長で19時間を要した9月末の大規模ブラック・アウトは、国内ほぼ全土に大混乱を生み、電力総需要量の実に17%近くを輸入に依存する「原発なき先進国」イタリアのエネルギー問題が、危機管理問題とともに浮き彫りとなった。

経済面では、状況好転に繋がる要因は依然少なく、2003年の経済成長率は0.3%と、近年最低の成長率を記録した前年を更に下回る結果となっている。

2. 日本との文化交流事業

日伊関係は引き続き良好を保っており、姉妹都市数も年々増加して現在32を数え、イタリア国内では、各地の地方自治体などが主体となって日本文化紹介・日伊交流事業を企画するケースが目立つようになった。また、課外活動として日本語教授を行なう高等学校が一部の州で急増したのも特筆すべき点である。

日本文化に対する一般の関心は、古典文化・伝統芸能、食、漫画・アニメーション、映画、建築など、従来からイタリアで人気の高い分野に依然偏りがちであり、またマスメディアで頻繁に取り上げられる日本も、ステレオタイプを脱け出るものは少ない。しかし、各地で開催される日本祭などに目を向けると、現代日本の美術、音楽、舞台公演、文学なども好んで取り上げ、事業としても優れた企画が、僅かずつながら着実に増えている。

2003年度にイタリア国内で開催された日本関連文化事業のうち、とくに大きな話題を呼んだものとしては、2004年2月にオープニングを迎えた「浮世絵展」(ミラノ王宮・基金助成事業)や、同じく2月に、ローマ・音楽の庭アウディトリウム、ナポリ・サンカルロ劇場ほかイタリア各地主要劇場を巡回した「鼓童、和太鼓公演」が挙げられる。総計約600点の浮世絵をテーマ毎に展示した前者は、各種メディアで連日大きく紹介され、これに関連して日本特集を組むテレビ・雑誌なども多く、大評判となった。

3. ローマ日本文化会館の活動

<活動方針>

前年の開館40周年に企画された各種大型記念事業などを通じて、大きな拡がりを見せたイタリア市民の日本文化への関心を維持し、一層拡充して日本理解の促進に努め、更には日伊が手を取り合って共通課題に取り組んだり、共同で新たな芸術を創作したりする動きをとくに支援することを目指した。

事業計画にあたっては、古典芸能など当国で人気の高い分野の事業を通して日本に興味を持つ層を更に広げると同時に、長い伝統の上に育まれた日本の優れた現代文化を、その背景とともに積極的に紹介して、生きた現代日本社会の姿をさまざまな面から伝えること、多様化するイタリア人学習者のニーズに応え得る適切な日本語教育を支援すること、研究者間のネットワーク強化や交流促進に努め、持続的かつ現代的な日本研究を進めること、広範な分野における日伊対話の機会を多く創出することを目指した。同時に、各地域毎の文化的独自性を十分考慮に入れて、イタリア全国を対象に事業を展開することを心掛けた。その地に根ざして活動を行なっている芸術家と協力し、また、在ミラノ総領事館、あるいは各地の劇場、映画館、美術館、大学や各種フェスティバル等関連機関と連携して、ローマ以外の地においても数多くの事業を行なうことができたのは、2003年度の成果のひとつであった。

<2003年度事業例>

- 「Mini case in Giappone : 日本の小さな住宅展」(2003年10月10日～12月12日、ローマ日本文化会館展示ホール/ローマ)

日本の大都市空間の中で限られたスペースを最大限に利用して住宅を建てるにあたり、7名の若手日本人建築家がそれぞれに編み出した設計プランや素材のアイデアを、模型、パネル、動画プログラムを用いて紹介した建築展である。キュレーションは、ドイツ人建築家のハンネス・レスラー氏、出展は、日本で活躍中の30代の建築家である、アトリエ・ワン、フォブ・アソシエーション、西沢大良、奥山信一、若松均、佐藤光彦、玉置順の各氏。従来日本の建築はイタリアにおいて高い評価と人気を集めているが、今日の日本人が実際に住の場としている一般住宅建築が紹介される機会は稀少であるため、専門家や建築を学ぶ学生たちの注目を浴びた。加えて、一般市民からも、日本人の美意識、生活習慣、住環境に対する姿勢などを垣間見ることのできる楽しいプロジェクトとして好評を博し、加えてコンピュータを駆使して制作した美しい立体映像によるプレゼンテーションも功を奏し、幅広い層に高い関心を呼び起こした。総来場者数は1,500名を超え、続編企画を望む声も多く寄せられた。



Mini case in Giappone : 日本の小さな住宅展



からくり人形 レクチャー・デモンストレーション
弓曳童子実演

- ・「日本のロボット」レクチャー・デモンストレーション、「からくり人形」レクチャー・デモンストレーション(2003年6月25日～28日・2004年1月22日、ローマ日本文化会館展示ホール・講堂/ローマ)

ロボットとからくり人形の両方を同年度内に紹介することにより、日本の誇る科学技術を生み出し、支えてきた文化的・歴史的背景を、わかりやすくイタリア人に伝えようとした試みである。6月の「日本のロボット」レクチャー・デモンストレーション(在イタリア日本大使館と共催)では、高西淳夫早稲田大学ヒューマノイド研究所教授による講演、AIBO、PINO、PAROの3種のロボットの実演、写真パネル展示により、一方、1月の「からくり人形」レクチャー・デモンストレーションにおいては、末松良一名古屋大学大学院教授の講演、九代目玉屋庄兵衛氏による弓曳童子、茶運び人形、猪口運び亀の実演、写真パネル展示を通して、それぞれの歴史、構造や最新事情について総合的な紹介を行なった。「日本のロボット」レクチャー・デモンストレーションは、イタリアでも注目度の極めて高い日本の最先端ロボットの实演が見られるとして事前から大きな評判を呼び、3日間の会期中に多数の児童を含む520余名が殺到、また、「からくり人形」レクチャー・デモンストレーションにも1晩で200名近くの観衆が集まり、どちらにおいても、実演に見られる愛らしい動きとユニークな発想、高度な技術に感嘆の声があがった。日本の現代文化と江戸文化を有機的に結び付けて紹介したセット企画により、テクノロジーの水準の高さばかりが強調されがちな日本のロボットが、実は長い歴史をその内に備え、日本文化のエッセンスである豊かな遊び心と寛容なやさしさを具現したものであることを知ったとの評を得た。

- ・「和菓子」レクチャー・デモンストレーション(2003年11月27日～29日、ローマ日本文化会館講堂・ラツィオ州国立第一ホテルマン調理師養成専門学校大教室/ローマ)

近年イタリアで大ブームを起こしている日本食に関連した企画を、という多くの強い要望に応え、食の中では意外にもまだほとんど知られていない「五感で味わう」和菓子の世界を紹介した。文化会館で一般を対象に3回、調理師養成専門学校(中等教育機関)で学生を対象に1回、講義と実演を開催したところ、広報を始めた途端に予約が埋まる人気を見せ、日本に関心を持つ層の拡充に大きく貢献した。各回とも、まずは、株式会社虎屋・虎屋文庫の中山圭子氏が、目を見張る美しさの干菓子や珍しい道具、たくさんの写真、スライドを見せながら、歴史、成り立ち、種類、材料や製法などあらゆる面から、和菓子の魅力について歯切れ良くわかりやすい解説を行ない、続いて、同社の和菓子職人、持田昌利氏と宮本友子氏、虎屋フランスの吉田太氏が、観衆の目の前で各種生菓子を次々に制作して見せた。ただの餡の塊があっという間に椿や紅葉、林檎などの形に姿を

変えて、繊細な美しい和菓子上がっていく様子に、満席の観衆はただ息を飲んで見入り、「魔法の手」と賞賛が飛んだ。最後は、観衆も参加して「きんとん製・もみじがさね」を苦勞しながら試作、お茶とともに、大喜びで日本の味に舌鼓を打つ人々からは、「日本人の感性や思考方法、生活態度全般について考えさせられることが多くあり、和菓子は日本文化そのものだと感じた」、「イタリア人好みの『食』と『美』にスポットを当て、日本の文化と歴史をおしゃれに解説した非常に良質な事業。ぜひ定期的な開催を」といった声が聞かれた。

ドイツ

ケルン日本文化会館

1. 概況

2003年3月の議会演説でシュレーダー首相は、少子高齢化による社会保障制度の財政難、経済の低成長、400万人を超える失業者問題などに対処するため、制度の弾力化と自己意識の強化を図り、経済を成長軌道に乗せることが目的の包括的改革プログラム「アジェンダ2010」を発表した。

外交面では、2002年夏にシュレーダー首相が、米主導の対イラク武力行使に不参加の声明を発表して以来、米国との関係が冷却化していた。戦後の復興支援でも当初ドイツは欧州連合(EU)拠出金の自国負担分以外は支援しないと表明していたが、後にフィッシャー外相が世界銀行などの経由分を含めて合計1億9,310万ユーロまでの支援を発表した。また人的支援として、イラク刑事警察の訓練を行ない、医療関係緊急輸送機派遣を検討する意向を示し、米国との関係は改善しつつある。

教育面では、大学改革の一環で制度の国際化が進行している。一つは、若く有能な研究者に正教授の道を開くジュニア・プロフェッサー制度が昨年から導入され、30代初めの学者にも学内での独自の研究と教育の実践が可能となった。ブルマン教育大臣の中間発表によると、2003年には353人のジュニア・プロフェッサーが誕生している。改革のもう一つの目玉は、外国での就職時の有効度の向上、就学期間の短期化、若く柔軟な知的労働力の確保を目的として、国際的に通用する学士/修士号制度が導入され、2003年初めには、全国の15%にあたる1,600学科で新制度に移行した。

文化面では、連邦大統領府内文化大臣クリスティーナ・ヴァイス氏により、2003年初めに連邦文化基金と各州文化基金の統合が合意され、2004年1月から発効になる予定であったが、各州側の反発により難航している(2003年予算として前者は2,560万ユーロ、後者は各州に820万ユーロ)。連邦文化基金の2003年



日本のロボット レクチャー・デモンストレーション
PINO



和菓子 レクチャー・デモンストレーション

プロジェクトの四大重点は、「文化と都市」「文化におけるドイツ統合」「9.11テロに対する米国の挑戦」「東欧」であり東欧プロジェクトの一環として、2003 - 2004年は「ドイツ・ロシア：文化の出会い」年として、両国30都市で350の催しが行なわれている。

2. 日本との文化交流

ボンの連邦美術展示館にて、室町から江戸時代にかけての日本美術を概観する「日本の美、日本の心展」(8～10月、東京国立博物館所蔵品展)が開催され、約9万7,000人の来館者を集め好評を博した(基金は関連企画の能公演に助成、日本建築講演会を共催)。一方で、「草間彌生展」(11～2月、基金助成事業)と「河原温展」(3～4月)が、ニーダーザクセン州ブラウンシュヴァイクのHaus Salve Hospesで行なわれるなど、現代美術作家の紹介もなされ、幅広い範囲での日本関連事業が引き続き行なわれた。

映像分野では、黒澤明氏に関する展覧会(10～1月、フランクフルト映画博物館、基金助成事業)とシンポジウム(11月、ジューゲン大学、基金助成事業)が実施され、ベルリン国際映画祭では、昨年に続き日本人監督特集(清水宏氏、基金主催事業)が生まれ、同特集は、文化会館のほか香港国際映画祭でも上映された。また、数十本の映画上映を中心に日本文化を紹介するニッポン・コネクションは第3回を迎え、約1万5,000人を動員した。アニメ、漫画の人気はさらに高まっており、マンガ雑誌数も増加した。

舞台芸術分野では、依然、和太鼓に関心が集まっており、各地で公演が行なわれている。また、舞踏家・土方巽氏の写真展が開催され、対外関係研究所(ifa)のシュトゥットガルト、ボン、ベルリンの各ギャラリーにて巡回展示がなされた。

日本研究・日本語教育分野では、各州政府の財政上の理由から教育関連事業の合理化が進められており厳しい状況にあるが、日本語能力試験の応募者数は、ここ数年の500名台から、はじめて700名台を記録した。

3. ケルン日本文化会館の活動

<活動方針>

1999年の「ドイツにおける日本年」、2002年サッカー・ワールドカップ日韓共同開催関連企画などを通じて培われた日独交流のモメンタムを活かしながら、日本に対する関心を高めるだけでなく、相互理解を一層深めるため、若い世代をターゲットとした文化事業の実施、日独共同事業の展開、各地方とのネッ

トワーク強化、ドイツ語圏の日本語教育支援などに重点をおき、効率的な事業を実施した。

<2003年度事業例>

●「ジャクリーヌ・メルツ / 津田睦美：日独作家対話展」(2003年10～12月、ケルン日本文化会館)

スイス出身でドレスデンを拠点とする写真家ジャクリーヌ・メルツ氏と、フランスでも長年活動していた津田睦美氏(成安造形大学助教授)による現代美術展。メルツ氏は2001年に初めて日本を訪れた際に制作した作品により、津田氏は広島原爆ドーム周辺や米国でお土産として売られていた「原爆グッズ」をモチーフにした作品によって、「現代日本」を表現。オープニングでは、デュモン出版社芸術部門代表のマリア・ブラット氏が解説を行ない、地元新聞などにも取り上げられた。「美術館の長い夜」という、ケルン市内の美術館が11月の第1土曜日の17時から翌日3時まで開館するイベント時には、約1,200人が文化会館を訪れた。

●「薩摩琵琶・尺八演奏会」(2003年6月、ケルンほか計5都市に巡回)

半田淳子氏(薩摩琵琶、歌)と田嶋直士氏(尺八)が、古典(平家物語)から現代(武満徹氏、半田淳子氏、前田智子氏)までの曲目を演奏。本公演はケルン市において88年より隔年夏に開催されている「ロマネスクの夏」という宗教音楽祭からの出演依頼を端緒に企画され、ローマ、ミラノ(以上イタリア)、デュッセルドルフ、ケルン、ミュンヘン(以上ドイツ)を巡回した。とくに、ケルンでの公演は、ドイツ側企画行事への参加事業であったため邦楽に馴染みのない多数の人々に紹介できた点、聖マリア・イム・カピトル教会での公演の様子が西ドイツ放送のラジオで生放送された点で、その意義は極めて大きい。日本側の単独企画ではなく、地元の行事に参加するなどして、地元機関との協力・連携をさらに強化することの重要性を確認する事業となった。

●「小川洋子朗読会」(2003年9月、ケルン日本文化会館)

ドイツで過去2年間に『ホテル・アイリス』『妊娠カレンダー』および『薬指の標本』のドイツ語翻訳が出版され、新聞などにも書評が紹介された小川洋子氏による朗読会。小川氏による『薬指の標本』の日本語朗読、ドイツ人声優によるドイツ語朗読、司会者と作家の対話形式の質疑応答、一般聴衆との質疑応答があり、作家の文学観、関心、執筆に対する姿勢などを知ることのできる非常に聞き応えのある催しとなった。本朗読会はその後、ベルリン国際文学フェスティバルや、ベルリン・フンボルト大学内森鷗外記念館、さらにフランスの数箇所でも実施された。なおドイツにおける日本文学振興のための事業としては、ドイツ語図書における優秀な日本語訳を顕彰する「国際交流基金翻訳賞」の授与も行なっている。



薩摩琵琶・尺八演奏会



小川洋子朗読会

英国

ロンドン事務所

1. 概況

米国の欧州における最大の同盟国として対イラク戦争に踏み切った英国にとって、政治的に多難といえる一年であった。2003年2月にロンドンで行なわれた英国史上最大規模の反戦デモを皮切りに、全国各地で大規模な反戦デモが行なわれ、英国中に強い反戦ムードが巻き起こった。政府は、世論の強い反対を押し切って、同年3月、米軍とともにイラクに対する軍事行動を開始し、翌月にはイラクほぼ全域の掌握、フセイン政権の崩壊を見たが、戦争の大義名分を得るため政府がイラクの大量破壊兵器に関する情報を操作し、イラクの脅威を誇張したとされる疑惑を通じて、政府に対する国民の不信感やブレア首相の退陣を求める声が急速に高まるなど、ブレア政権は1997年の発足以来、最大の窮地に立たされることとなった。また、ユーロ導入や医療、教育制度改革などの諸問題においても、ブレア首相の指導力を問う声が野党のみならず与党労働党内でも強まりつつあった。

文化面において最も注目を集めた出来事は、2008年の欧州文化首都として、イングランド北西部の都市リバプールが選ばれたことであった。欧州文化首都は、EU加盟国が2005年から持ち回りで自国の都市を指名し、一年間、欧州文化の中心地とする制度であるが、ブリストル、カーディフ、ニューカッスル、オックスフォードといった並み居るライバルとの激しい指名争いを勝ち抜いたリバプールでは、芸術、建築、演劇、文学、科学などのあらゆる分野において年間を通じてさまざまな事業が行なわれる計画であり、同市の観光、投資、雇用の促進に大きく寄与するとみられている。

2. 日本との文化交流事業

2001年度に英国全土で実施された大型日本文化紹介事業「Japan 2001」を契機に、英国人の日本文化や社会に対する関心は確実な高まりを見せ、地方レベルでも日本文化紹介事業が盛んに催されるなど、わが国と英国の文化交流は全般的に良好な状況にある。

2003年度に行なわれた主要な日本文化紹介事業として、英国演劇界の鬼才サイモン・マクパーニー氏(劇団テアトル・ド・コンプリシテ芸術監督)が世田谷パブリック・シアターと共同制作した、日本人俳優起用のフィジカル・シアター“The Elephant Vanishes”(原作は村上春樹著『象の消滅』)、アルメイ

ダ劇場前芸術監督のジョナサン・ケント氏が演出し、狂言師野村萬斎氏が主演した、日本人俳優のみによる日本語劇“Hamlet”、舞踏家・振付家として世界的に著名な勅使河原三郎氏がダンスカンパニー“KARAS”を率いて、全盲の英国人舞踏家、スチュアート・ジャクソン氏と共演した、光と音と舞踏のコラボレーション“Luminous”などが話題を呼んだ。また、英国において毎年開催されている「ロンドン国際映画祭」では、北野武監督『座頭市』をはじめ国際的評価の高い新作が、そして「レインダンス映画祭」では、知名度はさほど高くないものの実力のある作品が多数上映され、それぞれ観客やメディアの好評を博した。

3. ロンドン事務所の活動

<活動方針>

2003年度においては、「Japan 2001」を通じて英国全土で芽生えた日本文化や社会に対する関心をいかに持続的に高めていくかが最大の課題であった。事業件数の点では、「Japan 2001」が実施された2001年度には遠く及ばないものの、対前年度比で増加傾向にあり、英国における多様なレベルでの対日関心や日英文化交流の芽を絶やさぬよう、とくに地方での事業展開や伝統文化と現代文化との事業のバランスに留意しつつ、日本文化紹介事業を積極的に支援するよう心掛けた。また、日本研究の分野においては、若手・中堅の学者・研究者にわが国での研究の機会が提供されるよう、そして日英間の知的対話が一層促進されるよう努めた。

日本語教育分野では、中等教育レベルの日本語教育支援を中心としつつも、当地政府の初等教育レベルにおける語学教育強化政策の発表を受けて、今後、初等教育レベル向けにどのような支援を行なっていくかを検討するため、同レベルにおける日本語教育の実態調査を行なった。また、とくに初等・中等教育レベルにおいては、語学教育と文化・社会紹介が密接につながっていることが多いことから、学校訪問などに際しては、日本文化紹介を行なっている機関(Japan 21や在英大使館広報文化センターなど)と連携し、日本文化紹介・日本語導入のプログラムを共同で実施することにより、より効率的な事業展開を目指した。

<2003年度事業例>

●“Ready Steady NihonGO! Project” 調査事業(2003年4月～2004年3月)

英国政府による初等教育レベルにおける語学教育強化の動向を受けて、同レベルにおける日本語教育現状調査“Ready Steady NihonGO! Project” 調査事業を実施した。調査の一環とし



からくり人形レクチャー・デモンストレーション
(玉屋庄兵衛氏)

で行なった全英の小学校に対するアンケートや、日本語を導入している小学校の現場訪問から、現在、日本語教育が導入されている約30校の小学校における日本語教育の実態や、今後日本語を導入したいとする学校の動きを把握することが可能となった。また、2003年9月には、初等日本語教育関係者を集めての情報交換・ネットワーク形成のための会合を持ち、また、11月には本調査の経過報告と初等日本語教育の実際を体験するワークショップを行なった。

●「からくり人形」レクチャー・デモンストレーション(2004年1月17日、大英博物館/ロンドン 1月19日、Museum of Childhood、City Arts Centre/エディンバラ)

からくり人形師九代目玉屋庄兵衛氏、名古屋大学教授末松良一氏による日本のからくり人形に関する講演および実演を大英博物館、Museum of Childhood、City Arts Centreの3会場において実施し、子供から大人まで約500人の参加者を集めた。からくり人形の精密な仕掛や精巧な動き、そして日本人の技術に対する探究心に驚きと関心を示した参加者が多かったが、とりわけ、からくり人形の実演に対する人気は高く、計8回の実演では毎回会場が埋め尽くされる程の大盛況であった。

●海外日本映画祭(2004年3月7日～18日、Birmingham Screen Festival/バーミンガム、Watershed Media Centre/ブリストル、Showroom/シェフィールド)

黒澤清監督『Cure』、是枝裕和監督『ディスタンス』、河瀬直美監督『につつまれて』など、日本人のアイデンティティと他者との関係性をテーマとして1990年代の秀作映画7本を英国バーミンガム、ブリストル、シェフィールドの3都市において巡回上映した。各作品の観客、BBCや『ガーディアン』紙といった主要メディアから高い評価を得ただけでなく、従来、日本映画が紹介される機会が少なかった地方都市での映画祭を実現することができた。



からくり人形 レクチャー・デモンストレーションにて
AIBOも紹介